共生共栄共義主義思想に関する考察

ド・ヒョンソブ

清心神学大学院大学校

＜ 目次 ＞

Ⅰ. 緒言

Ⅱ. 共生共栄共義主義の理解

Ⅲ. 共生共栄共義主義の現代化

Ⅳ. 結語

Ⅰ. 緒言

統一思想は人類に未来社会についてすべての人間が本来の価値を実現して真の生活を営むことができる理想的な社会になると展望し、このような理想的な社会の理念として共生共栄共義主義思想を提示する。[1] 共生共栄共義主義思想は理想社会の経済、政治、倫理分野でのそれぞれの特徴を現わす概念として、共義主義によって運営される経済体制や政治体制を意味することもある。神様が理想とされた創造理想の世界を到来なさしめる主要理論と言える。[2]

人類の長年の願いでもある理想世界に対する憧憬は人類の歴史におけるどの瞬間にも提起されない時はなかったし、これは今日でもやはり例外ではない。科学技術の発達と産業の発展は人類の経済、政治、倫理の面で大きい進展をもたらして来たし、それが今日の資本主義と民主主義の姿として全世界で根付いている。しかしそれにもかかわらず、資本主義と民主主義を理想的な経済、政治体制にするための理念は捜すのが難しく、このような状況は人類が追求する理想的な社会像に対する熱望と探求として受け継がれてきた。

そうだとすれば、統一思想は理想社会を渇望する人類に共生共栄共義主義が想定する理想的な社会の具体相をどのように提案することができるであろうか。経済、政治、倫理的側面で理想社会の姿を形象化する共生共栄共義主義の論旨は、決して触れることができない理想と現実の乖離に深く挫折するとか、理想社会に関する皮相な議論に嫌気を感じる人々により具体的で到達可能な道を充分に提示してくれる

のである。

共生共栄共義主義の概念を把握するために、先ずこの思想の根幹になる神主義を調べて見て、その理想が実現した世界の経済、政治、倫理的側面に該当するそれぞれの理念が含んでいることを整理しようとする。引き続き共生共栄共義主義思想が追求する理想的価値が今日の経済、政治、倫理などの分野でどのような形態の現実的価値に様変りして現社会にその姿を現わすことができるかを共生共栄共義主義の ’現代化’という主題の下で注意深く考察して見ようと思う。これは理想態として絶えず人類社会に正しい方向を提示する共生共栄共義主義思想が、現在を生きて行く人間に、現実態に踏みこんで、‘今ここで’という時空的な状況で、実際に実現することができる可能態に向かって進んで行くようにするものであるかに関する探求と言える。

Ⅱ. 共生共栄共義主義の理解

1. 共生共栄共義主義の基礎

統一思想は共生共栄共義主義について神主義を経済的、政治的、倫理的側面から扱った概念だと明らかにしている。すなわち共生共栄共義主義の根幹がすなわち神主義というのである。神主義は真なる人間が集まって成す理想家庭の定着と世界平和運動の根本理念になる思想として、一つの神の下一つの兄弟、一つの世界創建を目標として、‘為に生きる’を主唱するから ‘真の愛主義’とも呼ばれる。

人間は神の真の愛に基づく真の家庭を成すことによって、社会の最も基本的な単位を構成する。このようにしてできる真の家庭は家族利己主義を克服して乗り越えた真の愛の基礎共同体である。さらには真の家庭の集合体である社会は、真の愛を土台として共に生き、共に導いて行き、共に価値を追求する社会である。[3)]

このような神主義は先ず世界的価値観の混沌を解決する鍵として提唱されて来た思想であると言える。このために神主義は神の実存を明白にして、絶対的存在である神から付与される神聖不可侵なる人権を明確にして、誤った信念に従う地域と共同体を思想的に解放する一方、今日沒落して行く西欧文明を世俗的人本主義と退廃的物質万能主義から解放させようとする。[4)]

また神主義は頭翼思想であることを明言する。右翼でも左翼でもない頭翼である。人類の真の平和は左翼で成るのでもなく、右翼で成るものでもない。それは左翼と右翼はすべてその根本的な動機たる利己主義から脱することができないからである。自分を中心にして自国の実利のみを追求しようとする時、そこには永遠になくならない利害の相反があり、統一はあり得ず、平和もあり得ない。利己主義を打破する新しい世界主義が台頭しなければならない。世界的な理念の障壁を壊して、世界のために自分の民族を犠牲にすることができる主義がすなわち神主義である。[5] 自分より他人のために存在する利他主義はただ神の理想からのみ現われることができる。それは神が愛の本体であられるからであり、愛の本質は自分を犠牲して他人を生かす利他主義であるためである。したがって神主義の本質は愛であり、その愛は人間の四肢五体を動かす頭のような中心思想であるために、頭翼思想なのである。[6]

神主義すなわち頭翼思想は、神の真理と愛を核心とする思想であり、頭翼思想はより高い次元で左翼と右翼すべてを包容する思想である。神の愛を中心にした新しい価値観による愛他精神で左翼理念からは憎悪心、闘争心及び物質主義を除去し、右翼理念からは利己主義、自己中心主義を除去して、対立する両者を和解させて共同で神様と人類の宿願である理想世界の実現に向けて進むことができるように左翼と右翼を導くための思想がすなわち神主義である。[7]

2.共生主義

共生主義は理想社会の経済的側面を扱った概念であると同時に、所有の側面を扱った概念である。共生主義は真の愛を土台にした共同所有を追求する。ここで共同所有と言うのは神と私との共同所有であり、全体と私、隣人と私との共同所有を言う。共生主義は個人所有をある程度認めながら、それを自己の身の程に相応しい程度の所有を認める適正所有の概念である。[8] より詳述すれば、共生主義は公共の善を土台に人類全体が適正所有を基礎にして余剰生産物と利潤を共有しようとする。この時、適正所有は各個人の与件と状況によって多少の差はあるが、過不足がない状態を維持するための所有を意味する。しかし各個人によって適正所有のための法的な装置を用意することは容易ではなく、したがって個人の良心に基づいて成り立たなければならないという特徴がある。適正所有は個人の私有財産を認めるが、各個人が無制限の富を蓄積する状況よりは公共の安定と福祉のために社会に還元するなど、多くの制度的装置を通してその追求することが成り立つように努力しなければならない。したがって共生主義は適正

所有を志向してこれを通じて形成された余剰生産物と利潤を人間らしい人生を営むのに必要な基本的な食糧と財源に活用して、共に良い暮らしをする社会を建設するための経済理念である。

今日まで維持されて来た資本主義の基本的な経済哲学は人間の利己心を基礎にした市場主義の理念であり、このような経済理念では、公共の善や人間の利他心[9]に対して、既存の経済の流れをゆがめて経済活動が正しく成り立つことができないようにする障害要因のように感じられる。だからと言って現在の資本主義市場の流れが望ましい要因だけを形成するのではなく、むしろ資本主義のいろいろな弊害が現われているのが実情である。先進国による後進国経済の隷属深化、貧富の格差、社会の両極化現象など、いろいろな経済的危機が深刻化している傾向がそれである。したがってこのような資本主義の否定的要素を解決しようとする関心が増大しているのが現在の状況であり、なおかつ商品の生産と販売において利潤追求より顧客の価値創出を優先する傾向も現われている。

共生主義は一つの社会内で一時に施行することは難しい。むしろ既存の経済哲学と理念の限界に対する代案を提示して、これを修正して補完する方式で接近するのが穏当である。これは経済体制が一時に形成されるのではなく、持続的な変化と発展の過程を通してなされるためである。今日の経済危機のような現実は新しい経済理念の提示を通してそれを克服する機会にすることができる。したがって共生主義は既存の経済的危機を克服して補完する立場で接近し、初期段階の核心的課題を選定してこれを実行することができる具体的な方案を講じて漸進的に共生主義の理念を具現して行かなければならないであろう。

共生主義の核心である共生の概念はいろいろな意味を含蓄している。先ず、共の概念は‘共にする’、‘一緒にする’などの意味で、‘共にして疎外されることなく、等しく分けて疏通しながら一つになる’という意味を持つ。したがって経済的側面から、共生主義は共に生産して共に分け、共によく暮らす理念を志向する経済理念だと言うことができる。このような共生主義の概念は時代的状況を考慮して、懸案課題の解決を中心に漸進的に実行して行きながら、既存の資本主義の限界を克服して行くのが妥当なのである。

3.共栄主義

共栄主義は理想社会の政治的側面を扱う概念として、特に現代の主流政治理念である民主主義の代案という面で、未来社会の政治の特性を扱う概念である。[10] 現代民主主義は自由、平等、博愛などの価

値を追求する理念として、今日その地位と価値を占めているが、周知のようにその限界も明白に現われていることが昨今の状況である。一例として、代表による政治としての民主主義、すなわち選挙を通した代議制民主主義では不可避的に現われる死票によって、民意を正しく表わすことができないことが生じており、他の面では、選出された代表者たちが民意を最大に履行しない場合、選挙による民主主義の弊害が残っている。

したがってこのような民主主義の代案として、共栄主義は“万人が共に参加する共同政治に関する思想であることを標榜する。しかし共栄主義は代表による政治という点では民主主義と同一線上にあるが、代表を選出する方式においては民主主義と大きい差異を見せていると言うことができる。共栄主義が追求する政治では、各代表たちは立候補者の相互関係が競争者ではない協力者の関係であり、また代表に出るようになる動機が自分の意志でなく他意による選挙を通して行われ、莫大な費用と副作用が伴う選出方式の代わりに、簡単な投票手続きで厳粛かつ敬虔になされる推薦方式を通して行われることになる。[11)]

次に民主主義の三権分立について、共栄主義は権力の濫用を防止するための次元ではなく、三権の円満な調和を成すための次元の三権の業務分担であることを主張する。また権力の概念も、相手を強制的に服従させる物理的な力を意味するのではなく、真の愛を通して相手を感化させて動かすようにする権威でもって説明している。このように共栄主義は社会の構成員全体が互いに協調して共同の繁栄を追求する政治を志向し、そのような意味で現代民主主義の限界点を明確に指摘し、これを解決することができる代案を提示して、ポスト民主主義の具体像を提示しようとする努力を継続している。

4. 共義主義

共義主義は共同倫理の思想として、すべての人が公的及び私的に道徳と倫理を遵守し、実践することによって、正義が具現される健全な共同倫理社会を志向する思想である。[12)] ここで正義とは社会の中の一部の階層や階級あるいは集団のための正義ではなく、社会のすべての構成員が納得し喜んで従おうとする倫理と道徳を意味する。また特定の価値観や一部の宗教の教えに限定されず、すべての人々が従う普遍妥当な価値を意味する。したがって正義がこのような価値を持つためには、少数によって定義され、多数が受け入れるようにする受動的な状況の場合、それが普遍妥当性を持つとすることは難しい。社会

の構成員すべてが積極的に参与し、すべてによって合意された正義が社会の普遍的価値として定着する時、初めてその社会に正義が正しく立つことになる。そのために共義は誰かによって付与されるのではなく、皆が共に参加してすべての者の権威として自分たちに付与するのである。公義ではなく共義を旗印として標榜する理由がまさにここにある。共義倫理が持つ真の意味は皆が参与して導き出した正義が理想社会を成す礎石になるという事実にある。

現代社会はそれぞれの人生観、価値観、宗教観などを持つ多元主義社会であるために、社会全般にわたって支持を得る共同体倫理としての正義についての理解を必要とする。正義に関する問題は哲学をはじめとして政治、経済、法律などの領域で重要な主題として論議されてきた。したがって社会倫理の領域の理想的目標を立てようとする時、最も優先的に扱わなければならない主題がまさに正義に基づいた個人と社会の調和の問題である。共義主義が窮極的に追求する公義の実現は個人や集団すべてが共通に望むことであり、人間が本性的に追求する願いであると言うことができる。共義は個人の基本権を保障すると同時に、公益を増進させる社会正義の理念を根底に置いており、これは公義と公益の不可分性を意味するものと言える。

一般的に個別的人間と個人が属する社会について言及する時に注目しなければならないことは両者の中でどちらか一方を優先的に扱ってはいけないという点である。このような点にもかかわらず、近代資本主義は伝統的功利主義の土台の上で個人よりむしろ社会の重要性を強調して発展を企ててきた。しかし過去数十余年間、功利主義は個人の基本権を強調する自由主義の威勢に押されて劣勢を免れることができない状況である。個別的人間と社会についてもう一つ注目しなければならないことは、公益を個人の利益と区別すると同時に、公義と同一視しようとする傾向である。しかし公義と公益は同一ではない。個人の利益の一部が公益を含むこともでき、公益の一部に私益が含まれていることもできるが、共義はこのような状態ではない私益であると同時に公益であることを志向する。共義は私益と公益が共にある領域に位置するのである。

このようないくつかの点を考慮する時、共義主義は個人と社会がどのように協同体になることができるかに関する主題を絶えず深く掘り下げるべきであり、社会の中の個人が手段ではなく目的として待遇を受けられるように不断の努力をしなければならない。このために我々の社会は共義を具現するために喜んで献身しなければならないのであり、科学と技術の進歩によって今後の社会がどのような姿に変化すると

しても、人間が決して疏外されることのないように尽力しなければならないのである。

共義主義は皆が人権を持った人間として各自に付与された権利を正当に享受すると同時に、社会の構成員として当然に履行しなければならない責任を誠実に行使する時に実現する。しかし社会の一角で自分に付与された権利とそれに伴う自由のみを得ようとする動きがある。人間は権利と自由に対する旧態依然たる思考から脱して、権利によって享受する自由、責任に伴う義務があたかもコインの両面のように一緒になっていることを悟らなければならない。責任は権利のまた別の名前であることを皆が認識して、社会全般にそのような認識が広がって、権利の正当な享有と責任の誠実な遂行を共に考える社会になるように努力する時、共義主義の基礎が定着するようになるのである。

Ⅲ. 共生共栄共義主義の現代化

1.共生共栄共義主義の ‘共’ の哲学

前述したように、共生共栄共義主義はそれぞれ神主義を経済と政治そして倫理の面で扱う概念として、言い替えれば共生経済と共栄政治そして共義倫理の社会を成すための複合的かつ相互依存的な概念である。したがって共生共栄共義主義は ‘共’ の哲学を明確にしている。‘共’ は共にすることを通して経済、政治、倫理の分野で成り立っている既存の限界を越える哲学的範囲を持っているといえる。さらに言えば、越えるという意味は超越の概念を持つと同時に、既存の諸概念もまた十分に受け入れる包容の概念も持っている。これは固定観念に縛られる代わりに受容性、開放性を持つ開かれた概念である。

共の概念が持っているその第一は共同の意味である。共同は個人の自由と個人が属する共同体での平等を合わせた共同の自由と平等を意味する。言い替えれば、個人の自由が極大化されて起きるようになる利己的な自由は許容しないが、一方で共同体の平等に陥没して個人の自由を拘束することのない共同の自由と平等をいうのである。

このような共同の自由と平等をどのように調和することができるか。それは個人の自由と共同体の平等を共に保障しながら、両者が緊張関係に置かれる場合は社会全体の共同の善に沿って、どちらか一方にかたよった部分を克服するために努力することによって成すことができる。自由と平等の緊張関係がない理想的な共同体の実現のための相互補完的関係が定着することができるように、社会全体が意識の変

化を起こさなければならない。自由と平等の内、どちらも優先せず、どちらにも偏重しないかたよらない中庸を追求する時、共同の自由と平等は同時に保障されるはずである。

次に、共の概念は均衡の意味を持つ。均衡は保守と進歩のどちらか一方への偏向を止揚する保守と進歩の調和を意味する。保守と進歩は今ここでの状況を維持するのか、あるいは止めるかの両者に区分される。したがって保守と進歩は人間の生活が繰り広げられる所ではどこでも現われる人生の態度と言うことができる。しかし保守と進歩が相手を認めず、より激化して保守主義と進歩主義のイデオロギー的性向を帯びるようになれば、相手を認める代わりに批判し、拒否するようになる。保守と進歩の内のどちらか一方が排除され、他の一方だけが勢力を伸ばす場合は、むしろ社会が硬直して退歩する不幸な状況に置かれるようになることを悟らなければならない。したがって社会全体の安寧と発展を考えるなら、保守と進歩は均衡を成しつつ、相互補完をはからなければならないであろう。

もし保守と進歩が均衡を成すことができず、偏向に陥ってそれぞれ極右派と極左派に極端化されるようになれば、彼らが属する共同体は結局不幸な事態を迎えるようになるであろう。
極右派や極左派などの極端なイデオロギーが幅を利かせる社会では、共同体の安寧と発展を担保することができないことは明らかである。保守と進歩が共存しながら、互いの価値を認めて均衡を維持する時は、社会構成員たちの人生に幸せが保障されることになるはずだ。

そして共の概念は責任の意味も持っている。責任は自発的な参加から一歩進んだ主体的責任をいう。人類が歩いて来た歴史を振り返って見れば、人類が達成した経済、政治、社会などすべての分野で人間の自発的参加なしに重要な進展を成した場合はなかった。各分野で先駆け的見解をもって未来を展望しながら、自己自身のすべてを投入した自発的参加がなされたからこそ、人類は今日の時代的恩恵を享受することができたのである。

共同体が追求する理想を実現するためには、そこに所属する構成員たちが自発的に参加する水準を越えた主体的責任の姿勢を前提にする時に可能となる。主体的責任は社会構成員が共同体に委任した公権力を能動的に監視することだけではなく、それに対する責任も自ら担当することによって、共同体を導いて行く主体になるということを意味する。共同体の現状況に対する責任的姿勢は個人利己主義と集団利己主義を拒否してこれを改革するように刺激する。これは公権と誤用と濫用に対する徹底的な監視と抵抗だけでなく、それに対する責任から自分も自由ではないことを悟って、これを克服するために努力す

る人間が現われる時、責任の価値が初めて確実に現われるようになる。

このように共の哲学に基づいた共生共栄共義主義は共生の経済、共栄の政治、共義の倫理を志向する。共同と均衡と責任の価値を大切にする共生経済を開墾し、共同と均衡と責任の徳目が調和を成した共栄政治を創りだし、共同と均衡と責任の意味を常に振り返る共義倫理を広げて行く時、このような姿が一つになって共生共栄共義主義の社会を成すのである。

共生経済と共栄政治そして共義倫理を目標とする共生共栄共義主義は単に共生と共栄と共義の複合概念にとどまらない。共生と共栄と共義が土台となる経済と政治と倫理が人間の生活において互いに躍動的に関係を形成するように、共生と共栄と共義も互いに密接に関係を結んでいる。[13] 言い換えれば、共生経済と共栄政治は共義倫理の社会が土台になる時、正しく発現することができる。また共義倫理も共生経済に裏付され、共栄政治が支持してくれる時に正しく花が咲くことができる。したがって共生共栄共義主義は一つになって、その概念を見渡す時に、その完全な意味を把握することができるのである。[14]

2.共生経済

共生経済は共同、均衡、責任の価値が経済分野全般で持続的に追求される時に成り立つ。共同の概念 [15] は構成員間の疎通だけでなく、一緒に運営して管理するという意味であり、均衡は特定の個人あるいは集団に富が偏重されることなく、皆に適切に配分される過不足ない状態であり、責任は一時的な参加ではなく、経済活動の過程及び結果に主体的、能動的に参加することを意味する。

それぞれの概念を具体的によく見れば、共同経済は特定あるいは一部主導者に偏重されて来た既存の経済的交流や取引を越えて、共同で経済的危機を克服して経済的恩恵の疏外がないように配慮する経済理念である。共同経済は成長第一主義や発展にだけ焦点を置くものではない。共同で一緒によく暮らすことができる経済理念を追い求めるためである。ここで共同の概念は単に互いに疏通して関係を結ぶ次元を越えて、みな疎外される者がなく、誰もが経済の主体になることができ、経済的恩恵を受ける権利を付与するという意味を持っている。

次に均衡経済 [16] は富の偏差による両極化問題を解消して均衡的な発展を追求する経済理念である。このような理念が実現するためには成長において均等な機会を提供する制度が用意されなければならない。特定あるいは一部が主体の主導で成り立つ経済活動の弊害を解決して均衡的発展を持って来るよう

に多様な経済的与件の改善と適切な規制を施行する必要がある。そして均等な分配の原理が施行されるように導くものでなければならない。経済活動で仕方なく現われる成長の偏差は、後で否定的な社会問題に飛び火する可能性が大きい。[17] したがって共同体内の分配制度を通して公正な課税が成り立つようにすると同時に、成熟した市民意識を通して自発的な気分の文化で富が再分配されて均等な成長につながるようにしなければならないのである。

そして責任経済 [18] は共同体に所属する構成員なら誰でも経済活動の責任を持つことができる場に進むことができる権利を保障し、経済活動において目的とそれを成すための過程が責任の領域にすべて含まれて、有限な資源と大切な環境の保護と維持のための責任を追求する経済理念である。これをより細分化して説明すれば、責任経済は人間が経済現場で自分の価値を認められてそれに相応する富を受けることができる権利と責任を負うことができるように保障してくれなければならない。人間は経済活動において疎外されたり、排除される場合には、共同体内で人間らしい生活を営む機会を得ることはできない。したがって共同体のすべての人が社会に寄与して自分の生活を繰り広げることができる職場を持つことができるようにしてするのは責任経済の重要な徳目である。

そして経済活動において追求する目的とこれを達成するための過程が正しく施行されるように皆が責任意識を持たなければならない。利潤追求という経済活動の目的を達成するために景気が過熱する場合、ややもすると正しくない過程を選んでこれを目的として正当化することが起こり得る。このようなことが起きないように、目的の追求とそれに伴う過程の選択に正しく責任を負わせることができる風土が形成されなければならないのである。また既存の経済は無分別な開発と環境破壊が暗黙的に黙認されてきたが、それによって地球温暖化をはじめとする各種の自然災害や被害がブーメランになって戻って来ているのが実情である。したがって責任経済はむしろ環境を保護し、新しい再生エネルギーを開発する一方で、公害を減らして自然そのままを保存しながら、新しい経済価値を創出することができる方案を講ずるために努力しなければならないのである。

このように共同、均衡、責任の概念に即した共生主義は現実の中に共生経済の姿で現われるのである。共生経済は既存の経済理念とは線を引く新しい理念だと言うよりは、むしろ既存の経済理論によって推進されて来た過程で生じたさまざまな課題と問題点を克服す代案を提示する経済理念だと考えることができる。このような代案中心の共生経済は既存の資本主義を中心とした市場経済を動かそうとする個人の利

己心に対する代案によって、利他心と公共の善を追求し、それに伴う共同と均衡と責任を指向する経済理念が根付くようにするための方法論的接近である。

市場主義の基本原理は個人の利己心であると言える。しかし市場が発展するほど、むしろそれによる副作用が現われていることを現在の状況を通して十分に推察することができる。このような状況で共生経済は個人の利他心を経済活動の出発にしようとする。そのようになる場合、市場が発展するほどより透明な経済体制を形成することができるし、利他心は新しい競争力で台頭するのである。このような概念を企業の核心目標として立てる経営哲学が登場するのがその良い例である。すなわち単なる利潤追求から顧客の価値創出をまず目標として設定するのである。企業の窮極的な観点は利潤追求であるが、相手方のために価値創出の機会を与えるほど、企業にもより大きな利潤が戻ってくることができるという論理である。このように利他心は熾烈な経済現場において無条件の分け前や奉仕のような形態で表わすことができなくても、消費者に最大限の価値を新たに創出してくれる経営戦略にすることができる価値を持っている。

共生経済で重要な役割をする公共善の核心は、企業の利潤追求が顧客のための価値創出によって形成される時、両者とも皆満足できる方向に導く羅針盤である。企業の健全性は市場の活性化に影響を与え、顧客の製品購買は顧客のための企業の価値創出の大きさに比例する。このような肯定的関係が正しく成り立つように導いてくれることがまさに公共の善であり、透明性と公平な課税、分配の均衡性がこれに該当すると言うことができる。

共同体の経済は成長優先政策だけでは構成員全体を満足させることはできない。生活の質を高め、共によく暮らすことができる条件を造成して、皆が人間らしい生活を営むことができる共同体の建設を指向しなければならない。共生経済は今までの経済を成長第一主義で評価するよりは、その間に現われるようになった経済的諸問題を解決し補完しながら、精神的、物質的に人間の生活の質を向上させる方案を講ずることが要請される。これは政治分野で結実された政治的民主化が経済分野でも経済的民主化として定着するように努力しなければならないことを意味する。経済的民主化は利潤追求のための無限の競争の論理を越えて、企業と顧客そして政府が互いに有機的な関係を形成して、共によく暮らすことができる共同の機会を提供し、相互間の均衡を追求し、皆が責任を分担しながら共に生きて行こうとする共生経済を通して成すことができる。

理想的な社会を指向するためには共生経済が必須である。企業は利潤追求の前提として顧客の物質

的、精神的価値創出を優先的に努力をしなければならず、顧客は賢明な経済活動を通して企業が健全に成長するようにしてやらなければならない。社会全体が経済的に豊かで、持続的に発展することができる動力を備えて、生活の質を高めることができる基盤は共生経済を通して定着することができるからである。

3.共栄政治

共栄政治は社会の構成員たちが互いに協調して共同の繁栄を追求する政治をいう。すべての人の協力と疎通でなされる政治である。共栄政治は共栄主義の理想を実現する一種の政治的方法論として、共同と均衡と責任の原理に基盤を置いて、既存の共同体を運営する公的な権力の正当性獲得と執行方式において革新と変化をはかるために共同政治、均衡政治、責任政治を追求する。共同と均衡と責任の価値をすべて等しく反映している共栄政治は社会構成員全体が共同で参加して、均衡的に行動しながら責任を果たす政治を指向する。したがって共栄政治は特定の集権勢力中心の国家権力による一方的な政治を止揚する。

先に共同政治は少数と弱者を合わせて、構成員全体が共に社会を導いて行く政治を追求する。政治の主要行為及び領域別に社会構成員の実質的で責任ある参加をはかろうとする。このために政治家中心の専門化された政治体制を補完し、一般人も政治に簡単に参加するようにハードルを下げなければならない。また莫大な費用をかけながらも非効率的で、一方でその代表性までも指摘されている選挙方式で補完しなければならない。共同政治のこのような態度は、個人と共同体双方の目標を満足させる道を探す努力を怠らず、少数者と弱者の立場と意見を尊重し、力による強制性に訴えないで、絶え間ない対話と説得を通して相手の同意を求める疎通政治の具体的な姿とみられる。

次に社会構成員間に偏差なしに政治的利害関係による立場から脱皮し、協力を追求して行く均衡政治を模索する。自分が属する集団の実利の代わりに、全体の公益を優先し、寛容の精神でリーダーシップを発揮して、社会構成員全体の共存と繁栄をはからなければならない。このために地域構図、階級構図中心の党派主義の政治制度が持つ対立的性格を克服しようとする努力が特別に要請される。また多様な階層と社会構成員たちの要求を反映することができる方法的論議も成り立たなければならない。共栄主義の実現のために、均衡政治は社会構成員によって選出された代表を通して行われる間接的な代議政治と

構成員の意見がすぐに反映される直接的な参加政治が調和した政治、階層間、地域間の不均衡を解消する政治の姿を見せなければならない。

そして政治行為の過程と結果まで全般にわたって審議し、反芻しながら、引き受けた義務を果たす責任政治を追求する。政治の場でたまに登場するのが、目的の達成のために不可避的に正しくない手段を政党化させる姿である。これは当面の実益を得ることができるかも知れないが、終局になってそれに伴う副作用を必ず経験しなければならないという事実を考える時、絶対に行ってはいけない政治的悪習であることを忘れてはいけないのである。また政策一貫性や歴史性を無視して、状況の変化または利害関係の変化に従って路線を異にする根のない政治活動を改革することによって、政策の持続性と安全性を確保しなければならないのである。

このように共栄主義が標榜する共同政治、均衡政治、責任政治の三つの政策基調を通して共栄政治の下絵を描いて行かなければならないのである。強者と多数者が弱者と少数者に配慮して、共に導いて行く政治、社会構成員と代表、中央と地域などが調和と協力を成す政治、すべての政治の主体が最後まで参加して、与えられた役割に最善をつくす政治が共栄政治の指向する点になる。

4.共義倫理

共義倫理は共が内包している共同と均衡と責任の価値が共同体の構成員全体に絶えず知らされて議論されるこのような過程によって形成された共同体の文化と情緒を通じて社会の全領域がそれに符合する方向へ進展して行く時に成り立つ。共同の概念は社会構成員全体が原則と基準にしなければならない公義を論ずることにおいて、皆が一緒に論議の場に参加して、それを通して構成員全体の認定と受容で公義が合意されることを意味し、ひいては皆が共に公義を実践することまで包含する。そして均衡は階層と地域の偏差を解消して、所有、性別などによる差別を止めて、自然と人間の共存を追求する均衡の美徳で経済を眺めることを意味する。また責任は社会の安定と発展のための基礎である共義の価値が毀損されないように、皆が一緒に守って行く一方で、共同体内で起きたさまざまな問題を直視して、これに対する責任感ある姿勢で共に対処して行くことを意味する。

それぞれの概念をより詳細に見れば、共同倫理は共同体の維持と発展の基礎となる社会全般の原則と基準を樹立するにおいて、構成員全体が同参して合意する時に成立することができる。[19] 特定の個人

や一部の集団を中心に彼らの立場だけが反映されたまま決められた主題は決して公正だということはできず、したがって社会の原則と基準だと称えることはできないのである。一方で、合意した原則を構成員すべてが喜んで受容し、これを尊重しなければならない。合意を経たとしても、これに同意せず従わない場合、それらの原則はその役割を果たすことができないからである。そして構成員全体の参加を通して決定となり、これを受容すると言っても、実行に移さなければその原則と基準は社会を変化させることはできない。社会的実践を通して原則と基準が具体化され現実化される時、共同体の維持と発展が保障されることを忘れてはならない。

次に、均衡倫理は階層と地域によって人間の生活の質が顕著な差を見せる両極化を止めるために努力する。両極化は社会の価値に関する構成員の価値観を画一化ないし対決的な構図に追い込み、結局は社会的または国家的費用を誘発して、総体的なエネルギーを消耗させ、社会全体に否定的効果を起こす。したがって両極化は社会の発展を阻害する要素として、必ず解消しなければならない課題である。一方で社会の堂々たる主役として同等な価値を持つ男性と女性が同等な権利と社会的責務を持つように社会が先に立たなければならない。男性と女性が生活のすべての領域で同等な参加を保障されて同等な地位で同等な権利と義務を享受することは共義倫理が備えなければならない重要な要件の中の一つである。そして人間と自然が共存し共に生きることができるように、自然と人間、自然と社会、政治的生活様式の根本的な変化を起こそうとする。自然はそれ自体で重要な価値を持っていることを認め、人間が自然に対する責任感ある友達になろうとする意識を内面化する時、生態的危機を克服することができるからである。このために均衡倫理は自然に対する人間の意識転換とともに自然の中で生きて行く人間の生活様式の総体的な変革を同時にそして持続的に推進しなければならないのである。

そして責任倫理は社会の構成員として自分の役割を遂行しながら、他の人々の人間らしい人生に寄与し、ひいては社会の発展にも貢献しようとする理念である。皆が人間らしい人生を享受しなければならないという命題は理想社会の大前提として、社会に属するすべての人々に例外なく同一に適用される基本原則でなければならない。同じ時代に呼吸して同じ空間を生きていく共同体の存在として、周囲の難しい人々から絶望と苦痛を取り除き、今一度新しい人生を生きていけるように助けの手を差し出さなければならない責任がある。我々の社会が相変らず暖かい心を持っていることが分かるようにすることによって、新しい希望と人生への意志を培ってくれなければならない。一方で、責任倫理は皆が共同体の安全と発展

は一時的な参加や少数者の献身的な努力だけでは決して成り立つことはできず、社会構成員全体が責任意識とそれに伴う具体的な実践を持続的に行う時に実現することができるものであることを強調する。社会の基本原理と規則を決めるのに皆が参加する共同倫理、社会を構成するすべての階層と集団の中でどちらか一方へ偏重されることなく、等しく発展する均衡倫理と社会問題の解決に皆が対処する責任倫理は、社会が必ず成し遂げようとする最高の価値として、時代の変化と関係なく必ず守られなければならない原則である。したがって我々皆が先に立って社会の正義がその光を失わないように確固たる責任意識と粘り強い実践によって、社会正義を成すための諸価値が脅威を受けないように守護しなければならないのである。

Ⅳ. 結語

共生共栄共義主義は統一思想のいう神主義に立脚した理想的な世界を社会的視覚から出発して、経済と政治と倫理という代表的な三つの観点から光を当てたものと考えることができる。それだけに、共生共栄共義主義を通して社会の多くの人々が、統一思想が指向する理想世界に関する定義と共に、それが現実化されていく具体的な様相に接することは、今後到来する未来の理想社会について真剣に熟考し、それを実現する方法について現実的に苦悶する時、大きな助けとなるであろう。

共生共栄共義主義の根幹である神主義と共に、各理念の理解を試みたことは理想社会の理想態を把握するためであり、共生共栄共義主義の公の哲学と共に、共生経済、共栄政治、共義倫理の現代化を企図したことは、今日の現実態から理想態に向けて進み、実現することができる可能態を打診するためであった。このような作業は我々に今日の生活を生きていく意思を与えてくれるし、また我々が生きてきた人生を意味あるものにしてくれる。

共生共栄共義主義は理想社会に関して、制度的な面だけでなく、人間の意識的な変化も共に成り立ってこそ可能になる。制度的な装置を通して理想社会を追求する中で、現われる多くの懸案を解決することも重要だが、よく組織されたどのような制度であれ、それを運営する人間の意識が成熟し変化しなかったら、制度も結局は無用になってしまう。共生共栄共義主義は人間が本来的に追求しなければならない人生とはいかなるものなのかについて、絶えず問いを投げかける。そしてこれを通して人間の意識が私的所

有に執着する代わりに、自分の所有物を共同体と共有するようにして、自分が属する共同体の未来を一部に転嫁するのではなく、皆が共に責任を負って開いて行くようにし、構成員すべてが受容することができる根源的で普遍的な価値の追求に向けて人間の生活の方向を改めさせようとする。[20] 共生共栄共義主義は人類がより根本的な人生とは何かを持続的に探求し、絶えず人生の中で新しい価値を追求する人間にとって永遠の話題になるであろう。

注

1） 統一思想研究院、「統一思想要綱」、再版（ソウル：成和出版社、1994)、761

2）統一原理でも人類がつくる理想世界を共生共栄共義主義社会と説明している。世界平和統一家庭連合、「原理講論」（ソウル: 成和出版社、2002)、451、503、526

3）キム・ハンジェ. “共生共栄共義主義と T. More のユートピア思想」” 統一思想研究論叢第５集 (1999):95-119.

4) ローレンス・ハリソンは西欧式価値観と生活様式の全地球的拡散が人類社会の持続可能性に大きな脅威となっているという憂慮の声が出てからすでに長い時間が経ったと主張する。S. P. Huntington, L. E. Harrison, 文化が重要だ、イ・ジョンイン訳（ソウル: 金英社、2005）参照。

5) 文鮮明先生御言葉編纂委員会編、「文鮮明先生御言葉選集」第 26 巻（ソウル: 成和出版社、1990)、236.

6) 文鮮明先生御言葉編纂委員会編、「文鮮明先生御言葉選集」 第 164 巻（ソウル: 成和出版社、1990)、194

7) 統一思想研究院、「統一思想要綱」、2.

8) 統一思想研究院、「統一思想要綱」、761-762.

9) 経済で活用される利他心は他人の利益を自分の利益を増進させるための手段として活用する場合である。例えば、慈善団体の後援者は受恵者の必要よりは自分の名誉によって施行する場合があり、これは長期的に自分に役に立つことができるという観点で成り立つ。パク・サンス、「経済哲学」（済州: 済州大学校出版部、2003)、20.

10) 統一思想研究院、「統一思想要綱」、769.

11) 共栄主義の共同政治は厳格に言って民主主義政治ではなく兄弟主義的民主主義政治と表現することができる。ここで兄弟主義は天父主義を中心した兄弟主義の政治を言う。統一思想研究院、「統一思想要綱」、776-777.

12) 統一思想研究院、「統一思想要綱」、780.

13) プラトンは経済と文化そして政治の三つの領域が適切な均衡と調和を成した社会こそ基本価値を共存する正義の社会である、と言った。文化と倫理が同じ範囲を持つのではないが、両者は社会と密接な関連を結んでいるという点で意味ある類似点を探すことができると考える。キム・ナムド、「ギリシャ哲学研究」（ソウル: 鐘路書籍、1988）参照。

14) 現代政治哲学でも経済、政治、倫理などの主題を分離して説明するよりは一つにまとめて説明している。例えば、共義は正義の概念と非常に関連が深く、一方で正義は単に倫理的な問題だけでなく、政治的概念でもあり、経済活動でも正義がしばしば議論されている。チェ・ユシン, 「第3の代案としての共生共栄共義主義」 統一思想研究第2集(2001): 103.

15)共同の概念は真の愛を中心と祖父母と父母と子供が共に管理して運営するという意味だ。共同所有の概念の原型は家庭の中で成り立つ構成員間の所有概念である。統一思想研究院、「統一思想要綱」、763.

16) 均衡の概念は経済活動を通した財貨の生産、交換、分配、消費などに関する活動と共に心情と愛、感謝と調和が共に流れる物心一如の統一的過程である。統一思想研究院、「統一思想要綱」、768.

17) Joseph E. Stiglitz,「不平等の代価」 イ・スンヒ訳（坡州: 開かれた本、2013）参照。

18) 共生主義の観点での責任経済はすべての経済活動が利潤追求を目的にすることのみでなく、人類全体の福祉増進を目的にして、食糧問題を含む現実の難問題を解決する観点を持たなければならないという見解である。統一思想研究院、「統一思想要綱」 769.

19) 社会体制の正当性は社会構成員たちの真の対話を土台とした社会的合意から出てくる。しかし経済、政治的要因によって社会的合意が成り立つ手続きが脅威を受けるようになればその社会体制の正当性も脅威を受けるようになる。イ・ジョングジョン、「市場は正しいか？」（ソウル: 金英社、2012）参照。

20) チェ・ユシン, 「第3の代案としての共生共栄共義主義」 統一思想研究　第2集(2001): 103.

参考文献

キム・ナムド.「ギリシャ哲学研究」 ソウル:鍾路書籍,1988.

文鮮明先生御言葉編纂委員会 「文鮮明先生御言葉選集」 第 26 巻. ソウル:成和出版社,1990.

文鮮明先生御言葉編纂委員会 「文鮮明先生御言葉選集」第 164 巻. ソウル:成和出版社,1990.

パク・サンス.「経済哲学」 済州: 済州大学校出版部,2003.

世界平和統一家庭連合.「原理講論」 ソウル:成和出版社,2002.

イ・ジョングジョン.「市場は正しいか?」ソウル:金英社,2012.

統一思想研究院.「統一思想要綱」 再版. ソウル:成和出版社,1994.

Joseph E. Stiglitz.「不平等の代価」 イ・スンヒ翻訳 (坡州:開かれた本,2013)

S. P. Huntington & L. E. Harrison,“文化が重要だ” イ・ジョンイン訳 (ソウル:金英社,2005)

キム・ハンジェ、”共生共栄共義主義と T.More のユートピア思想” 統一思想研究論叢 第5集 (1999) : 95-119.

チェ・ユシン. “第3の代案としての共生共栄共義主義” 統一思想研究 第2集(2001):64-120